

## シベリア悪夢の抑留生活

和歌山県 上村豊 三

私は大正十二年六月十日に、和歌山県日高郡中山路村で、農業上村吉十郎と母ユワノの三男として出生した。

中山路小学校二年生のとき父親が死亡のため、幼い子供五人を抱えた母の苦勞は子供心にも痛ましく、母の寝顔を見た覚えがないくらいいつも忙しく立ち働いていた。兄二人は高等科を卒業するとそれぞれ徒弟に出て行き、私も大工見習いに通いながら、母をたすけて家に住んでいた。

二人の兄は順次兵役に服したが、次兄は昭和十七年に中支戦線で戦死した。長兄が翌年暮れ召集解除となつて帰宅。入れ替わるように私は翌十九年一月十日第二補充兵として福井県鯖江市の中部八〇部隊へ召集通知があり、同郷の広瀬英美君、前畑与吉君、寒川庄太

郎君、四人揃つて鯖江に同行、当日入隊した。鯖江に二十日くらいいて渡満し、東安省密山の迫撃砲隊に編入させられた。一期の検閲終了の後に憲兵の募集があつたので志願し、新京憲兵隊で六カ月の教育があつてハルビン憲兵隊に転属となり、阿城香坊憲兵分隊勤務中に八月十五日の全面降伏の放送を聞いて終戦を知つた。

終戦の直後にソ連軍の兵隊達が幌付きトラックで女性兵士と共に大声で歌いながら進んで来て、武装解除された。武器弾薬の類はもちろん、時計、万年筆や指輪等、見つけ次第略奪に遭うのが口惜しかった。また、満人達も掌を返したように兵舎や倉庫等を襲撃して略奪を重ねているのが残念だった。

日本人は全部海林に集結して野宿を重ねているうち、一般人と区別され、兵隊だけハルビンへ行軍して收容された。十月頃に無蓋列車に乗せられて、「綏芬河を経てウラジオオから帰国する」と半月くらい輸送され、ハバロフスクで降ろされた。收容所に入ってから下士官・兵と将校を分離されたのち、再び列車に乗せ

られた。今度は有蓋貨車で着いたところがイズベスト  
コーワヤのテルマというところだった。貨車輸送中に  
雪もちらつく寒さだったが、夏衣服のまま地震えた。

テルマの収容所では前職差別が行われて、警察官、  
憲兵、特務機関勤務経験の者は「天皇の犬」だったと  
いうことで、食堂に入る時に三回回って「ワンワンワ  
ン」と両手を床に付いて犬の鳴き声を出させられた。  
拒めば食べられないから、仕方なしに食堂の入口で三  
度回って両手を下に付いて犬の真似をしたが、あの屈  
辱に耐えるのが一番苦しかった。また、作業割り当て  
の時も重労働を割りつけられた。作業は鉄道敷設が主  
で、レールを延ばし、無蓋車で運んで来た土石を下ろ  
すのだが、下ろす速さを競争させられた。

防寒帽は日本軍の物だが、衣類は満服の綿入れ上下  
が支給されて、防寒用だったが風が付いて苦勞した。  
給食も、食パンがマツチ箱大の一個と大豆粒が数粒入  
った塩汁を飯盒の蓋に七分目くらいずつを一日に三度  
だけだから、急速に体力が弱っていった。

半年くらいで定期的に身体検査があって、ソ連の女

医が尻の皮をつまんで復元速度で一級、二級、三級に  
格付けされるのだが、私は三級が長く続いた。

収容所内でも軍隊当時の編成が続いていたから、食  
事の分配で階級差をつけられて、弱い者が栄養失調と  
なり死亡する者が続いた。

死者を埋める穴掘りに度々出されたが大変だった。  
その時は一、二、三各級の者が割り当てられた。暖か  
い時期でも表土の三十センチメートルくらいは凍結が  
解けているがその下は永久凍土のため、表土を除いた  
ところへ夕方まで薪を積み上げて燃やしておいて帰  
り、翌日、代わりの使役が掘り下げては一穴に十体く  
らいを裸で重ねて上から盛り土をした。上の死体の足  
が土から出たままの時もあったが、土が足りないので  
そのままにして帰った。

警戒兵の自動小銃に脅かされての作業のため消耗が  
激しかった。そんな折に、給食の中に塩魚が支給され  
ることが度々あったが、その魚を缶詰の空缶などで水  
煮しては二度も三度も水を足して沸かし直して塩湯を  
絞り、最後に魚を食べるなどして空腹に耐えた。

体力度三級の者は軽作業に就く決まりなので、初めは所内清掃と水汲みだったが、抑留三年目に入ると、街の清掃と水汲みになるようになった。清掃とは使槽の汲み取り作業で、冬季は凍結した糞尿を鉄棒で碎いて、桶に積んだ桶に入れて処理場へ捨てて行く役なので、収容所の門を通る許可証をそれぞれが受けておいて自由の時間に入りが認められ、単独で街へ行くことも可能だった。街の住宅の便槽掃除に行くから次第に住人と接する機会も増える。住人の中には心優しい親切な人がいて、折々にパン等を貰って食したり、タバコを貰って吸った思い出が懐かしい。

収容所で栄養不足から鳥目になる者が続出した。ビタミン補給に青松葉を煎じてのめば良いと聞いて、通行証を用いて街外れで松葉を取って帰り、煎じて飲んだり分けて飲ませたりした。夏は水汲みで、大八車に水桶を積んで住宅の生活用水補給に回った。

所内の空気がいつからとなく変わり、編成も三級者ばかり集められたのを機会に屈辱的挨拶をやめる決心をして決行したが、これにも勇気が要った。しかし、

重庄はくぐっても眼を伏せて暮らした。

収容所では衣類の補給がないため、戦友の死体から衣服を剥がして残存者の着替え用としたり、虱退治に衣服の煮沸消毒をしたりで苦しかった。特に入ソ最初の冬は体感温度零下六十度にも下がって、防寒帽の前垂れには息が凍りついて氷柱が下がり、全ての物が凍りつくので、ドアの把手等には布を巻いて鉄器の物には肌を直接触れないようくれぐれも注意されていたが、凍傷者も出て、同僚で死亡する者が多く出た。

体力の落ちた者は前夜に声を掛け合って寝ても翌朝眼がさめたら隣で冷たくなっているなど、医薬に見放された収容所生活で、寒さに馴れていない抑留一年日と体力の弱っていた二年目の冬から春にかけて、特に頻繁に死者が出た。収容された当初は、旧軍隊組織のまま入ったので上下差別も厳しく、初年兵や応召者は、古参者や上級者に優遇給食し残量を等分するので少量となり、衰弱に拍車をかけ、特に都会育ちの若者の消耗が多く、栄養失調となってシベリアの凍土に屍を埋められる結果を招いた。

昭和二十四年十月に入ったある日、数人が呼ばれて「移動するから支度せよ」とトラックに乗せられ、集結地から貨車でナホトカに送られた。ナホトカの幕舎では毎日共産主義万歳の教育洗脳を受けた。「日本に帰国したら、日本共産党と共にアメリカ帝国主義と戦え」と檄を受け、全員で拳を挙げて「エイエイオー」と応じた。

引揚船高砂丸に乗船する名簿の読み上げをするソ連将校が、片言交じりの日本語で番号と氏名を読み進む中、ア、イ、ウ……と頭文字順に呼び進んで、呼び残された同僚の寂しげな顔を残して乗船する。天にも昇る心持ちなり。

舞鶴港に上陸して復員手続きを済ませたが、ちょうど舞鶴に郷土出身の古久保恵美さんが日赤の従軍看護婦で勤めておられて、面会に来てくれたのは非常に嬉しかった。観音菩薩を拜む気持ちだった。

昭和二十四年十二月二十四日に長兄が南部駅まで出迎えてくれて、五年ぶりに母の懐に帰れた。帰郷後は若い頃習った大工職人として働く一方で、自家食糧確

保の農業を兼ねて五十年経とうとしている。

いつ思い出しても収容所での前職者いじめの苦難は忘れ得ず、腹立たしい限りだ。今日でも憎しみは消えない。私の抑留期間を通じて皆が一番嫌う清掃作業が一番楽しかった思い出となって残っているのは、幸せというべきなのであろうか。

嗚呼、青春の五年間、お国に奉公する覚悟だったが、酷い青春物語となった。凍死を免れたのがせめてもの慰めだった。もう戦争をしてはいかんと子孫に強く申し付ける。

## 満州、シベリア、そして故郷へ

島根県 福本富清

大正八年十月、島根県木次町に生まれる。家族は祖母、父、母、私の四人だった。祖母は八十歳を越す長命で、当時恩賜木盃を頂いた。私が小五のとき八十四歳の高齢で亡くなった。